

【ノート】

AO 入試に関する一考察

—広島大学A学部BコースのAO入試から見えてきたこと—

高地秀明，永田純一（広島大学）

A学部BコースのAO入試について，入試の実施状況調査，追跡調査を通して，その姿を見つめた。このAO入試は，年度によっては入学者数を十分に確保できないことや大学入試センター試験の得点が一般入試と比較して低いことなど，入学者選抜としては安定性に欠けることが指摘できる。一方で，小論文やプレゼンテーションなど多面的な評価尺度を用いていることから，入学の目的が明確で，モチベーションの高い学生が選抜されており，入学後の学業では指導教員から良い評価を得ている者も多いことが分かった。本稿では様々な指標からAO入試をどのように捉え，どのような観点で評価するのかを考えた。

1 はじめに

A学部Bコースの募集人員は，前期日程112人，後期日程28人，AO入試10人で，AO入試は大学入試センター試験を課す選抜である。AO入試の選抜プロセスは，出願書類等による第1次選考，小論文と面接による第2次選考，そして大学入試センター試験（以下センター試験と記す）を用いた最終選考の3段階の選抜である。センター試験の利用方法は，予め合格基準点を募集要項に明記しておき，受験を要する教科・科目のセンター試験得点合計が合格基準点以上であった者を最終合格者とするものである。センター試験を利用する目的は5又は6教科7科目を課すことで基礎学力を担保することである。そして，その求める水準を受験生に示すために合格基準点方式を採用している。したがって，センター試験の得点は高得点を競うものではなく，一定のレベル（基準点）以上があればよいのである。選抜のポイントとなるのは第2次選考の小論文や面接（プレゼンテーションや口述試験を含む）の評価であり，それらを通して受験生の能力・資質を多面的に測ろうとするものである。

開始後6年間が経過したこのAO入試は，入学者選抜としてどのように評価すればよいのか。入試の実施状況を分析するとともにAO

入試入学者について，学業成績(GPA)の分析，入試成績とGPAの関係，そして指導教員への調査など，幾つかの観点で調査を継続しているところである。本稿ではその一端を報告し，この入試をどのように評価していくのかを考えてみたい。

2 AO入試の志願者像

2.1 出身高校

図1はA学部Bコースにおける過去3年間（平成20年度から22年度）のAO入試と前期日程志願者の出身高校について，各高校の平成22年度国立大学合格者数（既卒者含む）をHPで調査し，4グループに分類してその割合を示したものである。ランクAは国立大学合格者201人以上または難関大（T大，K大）合格者20人以上，ランクBは国立大学合格者101～200人，ランクCは同51～100人，ランクDは同50人以下の高校である。ランクB以上の出身高校が前期志願者では70.7%，AOでは51.9%となっており，AO入試ではいわゆる進学校からの志願者の割合がやや低い。

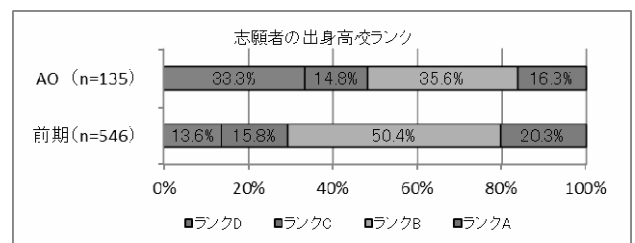


図1 志願者の高校

2.2 評定平均値

図2は平成22年度のA0入試と一般入試の志願者について、調査書評定平均値の度数分布を調べ、その人数の割合を示したものである。評定平均値4.1以上の者は、A0入試志願者では78%、前期日程志願者では68%である。また、4.9以上の者はA0入試志願者では19%と比較的高い割合になっている。しかし、各高等学校の評定を同一には評価できないことから、この状況を必ずしも成績優秀者が数多く志願しているとは言えない。

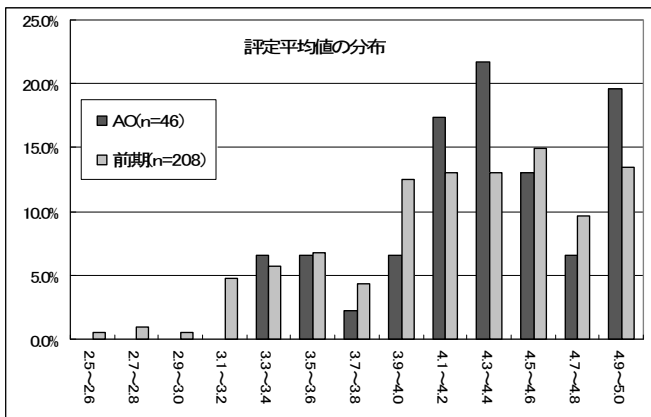


図2 評定平均値の分布 (H22年度入試)

2.3 センター試験得点

図3は平成22年度のA0入試第2次選考受験者と前期日程志願者について、センター試験900点満点の得点分布を示したものである。前期日程では640点以上の者が54%を占めているが、A0入試では存在しない。前述のように評定平均値だけで両者を見ると分布に大きな差異は無いが、センター試験では得点に大きな開きがあり、A0入試受験生の学力不足を指摘できる。しかし、毎年このような傾向かというとはそうではない。図4の年度のようにA0入試と前期受験者との差が顕著ではないこともある。

表1はA0入試の過去6年間の実施状況を示したものである。前述のように本学A0入試ではセンター試験のあつかいは合格基準点方式を採用しているため、年度によっては志願者

の学力にばらつきがあり、また、センター試験の難易も変化することから、センター試験合格基準点をクリアできない者が多く発生して最終合格者が少数となることがある。図3に示した年度がこれにあたる。合格基準点は620点であることからこの年度の最終合格者は僅か2名となった。このように年度によっては入学者数を確保できないなど、選抜として十分に機能しないことがある。これは、A0入試は募集人員が少数であるために、志願者数、志願者の属性、試験の得点状況など、様々なファクターの影響を受けやすい入試であると考えられる。

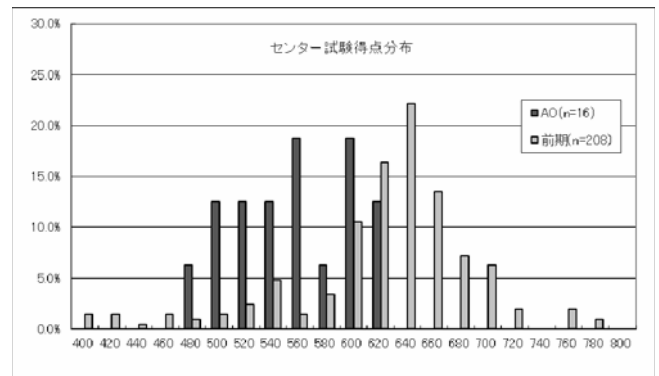


図3 センター試験得点 (H22年度入試)

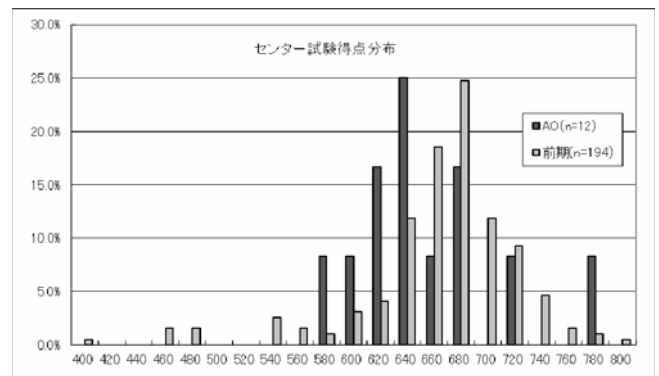


図4 センター試験得点 (H20年度入試)

表1 A学部BコースのA0入試実施状況

| 年度 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 募集人員 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 志願者数 | 56 | 55 | 49 | 41 | 46 | 36 |
| 第1次選考合格者数 | 29 | 28 | 28 | 23 | 33 | 28 |
| 第2次選考合格者数 | 13 | 14 | 12 | 13 | 16 | 14 |
| 最終合格者数 | 10 | 10 | 10 | 5 | 2 | 10 |

2.4 高校時代の活動状況と大学選択の意識

本節では、入学者を対象に、毎年の入学時にアンケート形式で実施している「入学者に関する調査」から、高校時代の活動状況、大学選択時の意識を問う設問についての調査結果（平成20年度から22年度の3年間の集計値、入学者は前期日程371名（回答者287名）、A0入試17名（同14名））を用いて、A0入試と一般入試前期日程入学者とを比較した。

2.4.1 高校時代の活動状況

表2は高校時代の活動状況について調べたものである。A0入試と一般入試前期日程入学者とを比較すると、A0入試入学者の特徴として、「問2 興味ある授業があった」の間によくあてはまると回答した者の割合は84.6%（前期58.2%）、「問3 自ら、興味のあることについて学習した」の設問ではよくあてはまると回答した者は71.4%（同23.7%）と高い割合となっており、高校時代から特定の学問分野に対して強い勉学意識を有していると考えられる。また、「進路や将来の目標について調べた」の間では71.4%（同39.4%）となっていることから、大学進学目的が明確であることも窺える。さらには、教員との関係も良好で、ボランティア活動や校外でのコンテストにもよく参加し、新しいことに積極的に挑戦するなど、この集団は意欲的に活動しようとする者が多いと思われる。

2.4.2 大学選択の意識

表3は大学選択の際に重要視したことを調べたものである。これを見るとA0入試入学者は本学の教育・研究に関することや教授陣・大学院などの教育環境などにも比較的高い関心を示していることが分かる。A0入試は大学で勉強したいことや志望の動機を明確にした上で志願する入試であることから、彼らは大学の内容についてもよく調べ、理解を深めながら進路を決定していると考えられる。

表2 高校時代の活動に関する調査

| 問 | 入試方式 | よくあてはまる | ややあてはまる | あまりあてはまらない | 全くあてはまらない |
|-----------------------|-----------|---------|---------|------------|-----------|
| 問1 授業の内容は理解できていた | 前期(n=286) | 45.5% | 49.3% | 4.9% | 0.3% |
| | A0(n=14) | 57.1% | 42.9% | 0.0% | 0.0% |
| 問2 興味ある授業があった | 前期(n=287) | 58.2% | 36.2% | 4.5% | 1.0% |
| | A0(n=13) | 84.6% | 15.4% | 0.0% | 0.0% |
| 問3 自ら、興味のあることについて学習した | 前期(n=287) | 23.7% | 51.2% | 23.3% | 1.7% |
| | A0(n=14) | 71.4% | 28.6% | 0.0% | 0.0% |
| 問4 教員とコミュニケーションを図った | 前期(n=287) | 42.5% | 43.6% | 13.6% | 0.3% |
| | A0(n=14) | 85.7% | 7.1% | 7.1% | 0.0% |
| 問5 進路や将来の目標について調べた | 前期(n=287) | 39.4% | 33.4% | 21.6% | 5.6% |
| | A0(n=14) | 71.4% | 21.4% | 0.0% | 7.1% |
| 問6 クラブ・サークル活動を行った | 前期(n=287) | 81.9% | 9.1% | 3.1% | 5.9% |
| | A0(n=14) | 78.6% | 14.3% | 7.1% | 0.0% |
| 問7 ボランティア活動を行った | 前期(n=287) | 7.0% | 18.5% | 34.8% | 39.7% |
| | A0(n=14) | 21.4% | 42.9% | 21.4% | 14.3% |
| 問8 学校外のコンテストや大会等に参加した | 前期(n=286) | 29.0% | 13.6% | 17.1% | 40.2% |
| | A0(n=14) | 57.1% | 14.3% | 0.0% | 28.6% |
| 問9 地域での活動に参加した | 前期(n=287) | 8.0% | 16.4% | 34.1% | 41.5% |
| | A0(n=16) | 18.8% | 37.5% | 18.8% | 25.0% |
| 問10 積極的に、新しいことに挑戦をした | 前期(n=287) | 26.8% | 44.6% | 26.5% | 2.1% |
| | A0(n=14) | 64.3% | 35.7% | 0.0% | 0.0% |

表3 大学選択において重要視したこと

| 問 | 入試方式 | よくあてはまる | ややあてはまる | あまりあてはまらない | 全くあてはまらない |
|----------------------|----------------|-----------|---------|------------|-----------|
| 問1 大学の教育プログラム・教育システム | 前期(n=287) | 51.9% | 37.9% | 8.0% | 2.4% |
| | A0(n=14) | 78.6% | 14.3% | 7.1% | 0.0% |
| | 問2 大学の研究レベルの高さ | 前期(n=287) | 35.5% | 37.6% | 22.3% |
| 問3 大学院が充実 | A0(n=14) | 50.0% | 35.7% | 14.3% | 0.0% |
| | 前期(n=287) | 5.9% | 11.5% | 49.8% | 32.8% |
| 問4 良い教授陣がいる | A0(n=14) | 21.4% | 14.3% | 35.7% | 28.6% |
| | 前期(n=287) | 17.1% | 42.9% | 31.0% | 9.1% |
| 問5 キャンパスの環境・施設・設備 | A0(n=14) | 35.7% | 28.6% | 21.4% | 14.3% |
| | 前期(n=287) | 42.9% | 36.9% | 17.1% | 3.1% |
| A0(n=14) | 42.9% | 35.7% | 21.4% | 0.0% | |

3 入学後の勉学・学生生活に関する評価

本節では、入学後の修学状況や学生生活の状況を調べた追跡調査の結果を報告する。

3.1 GPA と入試成績との関係

A学部BコースにおけるAO入試,前期日程,後期日程の3つの入試方式の平成18年度入学者について,それぞれの集団における大学入試センター試験の平均得点を算出し比較した(いずれの入試方式もセンター試験利用教科科目は同じ)。算出された平均得点をMとすると,

$M(\text{前期日程}) > M(\text{後期日程}) > M(\text{AO入試})$
となった。

次に, 学士課程教育の成績を示す指標としてよく用いられるGPAについて検討する。

入試方式別に, 学生集団のGPAの平均値を算出し比較すると, それぞれの集団の平均値の差は±1.0以内であり, ほとんど相違がみられていない。つまり, 大学入試センター試験における得点差は, 入学後の成績では顕著な差としては表れていないことになる。

A学部BコースのAO入試では, 選抜方法として, 小論文と面接が課されており, これらに出願書類と調査書を合わせて総合的な評価が行われ, 最終選考にはセンター試験が用いられる。入試成績とGPAとの関係を調べるために, (1)小論文, (2)面接, (3)大学入試センター試験の得点, そして(4)GPA(第8 Semesterまでのもの)の相互の相関係数を算出した(表4)。第8 Semesterまで修了した時点でのGPAをみると, 「大学入試センター試験」よりも「小論文」との関係において相関係数はより大きな値を示している。また, 表には示していないが, 「面接」はGPAとはそれほど強い相関を示さなかった。また, 入試科目間

表4 入試成績とGPA(8 Semesterまで)との関係(Pearsonの相関係数(r), $N=10$)

| 分析項目 | r |
|-----------------|--------|
| 小論文 vs GPA | 0.43 |
| センター試験 vs GPA | 0.27 |
| (小論文 vs センター試験) | (0.59) |

をみると, 「小論文」と「大学入試センター試験」との相関係数は比較的大きな値を示している。ただし, 選抜効果を考慮した修正公式を用いた場合, 直接選抜変数としての「大学入試センター試験」と「GPA」との相関係数は0.42となり, より大きな値を示している。また「小論文」は間接選抜変数であるが, 修正公式による算出値は, 若干の上昇を示している。

3.2 指導教員によるAO入試入学者の評価

3.1において客観的指標となるGPAについて検討したが, 次にAO入試入学者の指導教員を対象とした学生の特徴に関するアンケート調査の結果を報告する。

追跡調査に関しては, 卒業時の能力を評価したもの(富永・林 2008)や卒業後までを射程とした研究(吉本 2007)もこれまでに数多くなされている。これらの研究では, 分析対象者である学生自身による自己評価と, 学生以外の他者による評価の場合の二つのケースがある。いずれにしても, どのような能力を評価するのか, という評価項目としての学習成果(learning outcome)の指標策定が求められている。

平成18年度入学者選抜から導入されたAO入試の第1期生が平成22年3月に卒業したので, この学生を卒業年次において指導していた教員が評価するという追跡調査を実施した。その結果を報告する。

3.2.1 アンケートの質問項目

前述したように, learning outcomeとしての指標を策定し, その指標に応じた質問項目を検討しなければならないが, 今回は, 富永・林(2009)及び渡辺・武谷(2005)において用いられたものを参考に質問項目を設定した。これらの質問には, 単に学業(または学術)面での能力ばかりでなく, 対友人関係, あるいは学外活動等も含まれており, いわゆる認

表5 質問項目と結果 (A 学部 B コース)

| 質問項目 | 平均値 |
|---|-----|
| ①学生生活全般へのモチベーション | 4.2 |
| ②基礎的学力 | 4 |
| ③授業・卒論等への積極性 | 4.4 |
| ④想像力や思考力 | 4 |
| ⑤プレゼンテーション能力 | 4.4 |
| ⑥学生集団における指導性 (リーダー的存在かどうか) | 3.4 |
| ⑦他の学生への好ましい影響力 | 4.2 |
| ⑧学外における活動への積極性 | 4.3 |
| ⑨学生生活への満足度 | 4.5 |
| ⑩学業にとりくむ姿勢は好ましい。 | 4.6 |
| ⑪学術的に優秀である。 | 4.4 |
| ⑫学業以外の活動への取り組みは好ましい。 | 4.3 |
| ⑬周囲の学生との関わりは好ましい。 | 3.8 |
| ⑭学部・学科・類・コースの「アドミッション・ポリシー」と指導している学生の状況はよく一致している。 | 3.6 |
| ⑮将来は社会的に有為な存在になると、期待させるものがある。 | 4.2 |
| ⑯進路状況 → 就職 (専門職) 5名全員 | |

知領域のみならず、行動を伴う実践的能力も含めて調査するものになっている。対象となる学生は、当該コースの A0 入試入学者である。質問は、(1) 教員・学生の属性、(2) 現在の学生に対する評価、(3) 将来の学生に対する評価、の3つに分かれ、(2) の質問項目は表5の①～⑭、(3)は⑮～⑯に対応している。ここで、①～⑨の質問項目は、5段階で評価することとし、“募集単位 (学部・学科・コース等) の一般的な学生と比較して” 「より高い」「やや高い」「他の学生と同程度」

「やや低い」「より低い」を選択することとした。⑩～⑬と⑮は5段階で「つよく同意」「やや同意」「どちらともいえない」「やや不同意」「つよく不同意」を選択する。また、⑭については4段階で「つよく思う」「やや思う」「あまりそうは思わない」「全くそう思わない」、⑯については、「大学院進学」「就職」「未定」「その他」からの選択とした。回答は質問票に手書きで記入することとし (無記名)、学内便により配布と回収を行った。

3.2.2 調査結果

全学部の対象者 288 名に対し、回収率 55%となった (151 名分の学生に関する回答)。得られた回答について、5段階評価を5点満点、4段階評価を4点満点で得点化した。このうち、A 学部 B コースでは、対象学生 10 名中、5 名分の回答を得た。表5に項目別の平均点、図5に回答の内訳を示している。質問項目中もっとも高い評価が得られたのは、「⑩学業にとりくむ姿勢は好ましい」で、次に「③授業・卒論等への積極性」「⑪学術的に優秀である」といった項目の評価が高かった。一方、「⑥学生集団における指導性 (リーダー的存在かどうか)」「⑬周囲の学生との関わりは好ましい。」では相対的に低い評価となった。進路状況に関しては、4 名が選抜性の高い専門職に常勤として就職し、1 名が非常勤として就職しており、良好な進路状況のようである。

本調査は成績評価といった客観的指標ではなく、指導教員からみたさまざまな観点による評価についての無記名アンケート形式によるものである。この結果、回収された回答については、A 学部 B コースの場合には、学力的な側面に加え、積極性や姿勢に対しても高い評価が得られている。一方、人間関係等に関する指標については、ばらつきがあり、評価も分かれているようである。しかし、回答が得られたものについては、ほぼ全員が将来性に期待が持たれており、アドミッション・ポリシーとして設定した学生像が、在学時の状況と良く一致した状況のようである。ただし、今回の分析は、特定の募集単位でかつ回答数は少数である。今後さらに分析対象者数を増やす必要があると考えられる。

4 まとめ

A0 入試をどのように評価するかについて考えるとき、次の3つの観点から検討する必要がある。

- ① A0 入試の特質である評価尺度の多元化によって好ましい資質や能力を備えた学

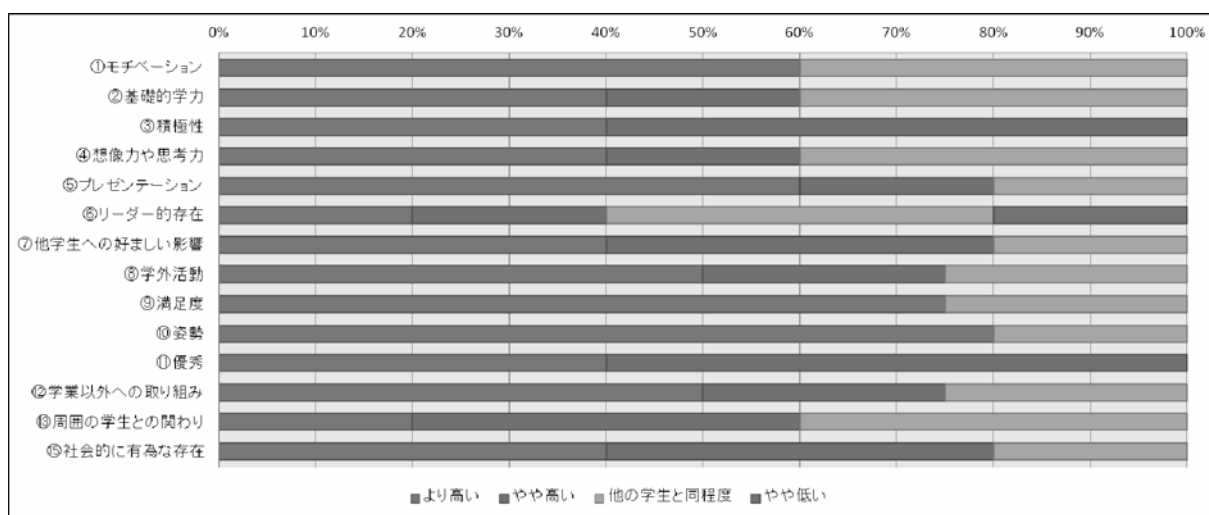


図5 表5におけるアンケート項目への回答の内訳（項目名は省略した表記）

生を選抜できているか。

② A0 入試入学者の学業成績，学生生活の状況はどうか。

③ 卒業後の進路状況はどうか。

これらを踏まえて 2.1～2.3 節で示した A0 入試の実施状況を見ると，募集人員が 10 人であり志願者数も少数であるため，年度によって志願者の基礎学力にばらつきがあり，良質な学生を一定数確保するにはやや安定性のない入試となっていることが課題の一つである。GPA については 3.1 節のように他の入試方式の集団と大きな差はない。この要因は，センター試験を課す合格基準点方式の A0 入試であることから，基礎学力は担保されていることであろう。一方で，2.4 節をみると A0 入試入学者は他者と比べると何事にも意欲的に行動しようとする者が多いことや自分の勉強したいことに対応して，大学についてよく調べ，理解を深めながら進路を決定していることなど，能動的資質を有した学生が多いと考えられる。このことは，3.2 節の指導教員のアンケート結果において「学業にとりくむ姿勢は好ましい」，「授業・卒論等への積極性」等の評価が高いことから窺われる。また，就職状況は，調査回答者の A0 入試入学者全員がこの学部コースの人材育成に対応した専門職に就いており，良好といえる。ただし，当該コースでは，入試方式別で教育課程は異な

っており，A0 入試入学者に特別な教育環境が与えられているわけではない。

以上のことから，A0 入試において評価尺度の多元化によってよりきめ細かな選抜を行うことで，能力特性が分散している集団から，アドミッション・ポリシーに対応した好ましい学生をある程度選抜できているのではないかと考えられる。今後，より安定した効果的な選抜方法の改善・開発が行われることが期待される。

参考文献

広島大学 (2009). 『入学者選抜に関する研究報告』，広島大学入学センター。
 葛城浩一 (2008). 「アウトカム指標のあり方を考える」『大学論集』 **41**, 439-454.
 高地秀明 (2009). 「高校生の大学選択と志望動機に関する考察——本学の入学者に関する調査から」『大学入試研究ジャーナル』, **19**, 83-88.
 富永倫彦・林寛子 (2008). 「A0入試1期生の卒業時における資質・能力」, 『大学入試研究ジャーナル』 **18**, 107-112.
 渡辺哲司・武谷峻一(2005). 「指導教員による九州大学A0選抜「一期生」の評価」, 『大学入試研究ジャーナル』 **15**, 7-12.
 吉本圭一 (2007). 「卒業生を通じた「教育の成果」の点検・評価方法の研究」『大学評価・学位研究』第5号.